東洋の思想と宗教　第四十號　令和五年（二〇二三）　三月　拔刷

佐藤一齋および大鹽中齋による王守仁『大學古本傍釋』の受容

――併せて佐藤一齋による「大學古本序」插注を論ず――

永冨青地

佐藤一齋および大鹽中齋による王守仁『大學古本傍釋』の受容
――併せて佐藤一齋による「大學古本序」插注を論ず――

永冨青地

王守仁（陽明、成化八年九月三十日、一四七二年十月三十一日～嘉靖七年十一月二十九日、一五二九年一月九日）の『大學』に對する注釋である『大學古本傍釋』は、明末の中國において刊行がなされ、清代においてもなお刊行がなされている。しかしながら、中國においては、本書によって、王守仁の『大學』解釋を知ろうとするものはほとんどなく、後述のごとく、陽明學の信奉者の間ですらも本書に對する僞作説が唱えられるほど、本書に對する關心は低いものであった。

一方、江戸期の日本においては狀況を異にしており、江戸後期の日本陽明學を代表する人物である佐藤一齋（擔、安永元年十月二十日、一七七二年十一月十四日～安政六年九月二十四日、一八五九年十月十九日）および大鹽中齋（平八郎、寛政五年一月二十二日、一七九三年三月四日～天保八年三月二十七日、一八三七年五月一日）は、いずれも『大學古本傍釋』を王守仁の眞作であるとして、そこから王守仁の『大學』解釋を探っている。また、彼ら二人はいずれも『大學古本傍釋』の編纂をおこなっており、日本における本書の紹介および普及に大きな影響を與えることとなった[1]。

本稿においては、佐藤一齋および大鹽中齋の『大學古本傍釋』に對する見解を探ることによって、中日兩國における本書に對する受容の大きな差異について見ていくこととしたい。

一、中國における『大學古本傍釋』の刋行について

初めに、以下の議論の前提として、前近代の中國において刋行された『大學古本傍釋』（以下『傍釋』と略）の版本について概觀していきたい。[2]

王守仁が初めて本書を刋刻したのは、正德十三年（一五一八）のことであった。このことについては、『王文成公全書』卷三十二「年譜一」の「（正德）十有三年戊寅先生四十七歲在贛」の項に、「七月刻古本大學。・・・至是錄刻成書、傍爲之釋而引以敍」（七月、古本大學を刻す。・・・是の錄、刻して書を成すに至り、傍らに之れが釋を爲して引きて以て敍す）と、同年に序文と傍釋とを附した『古本大學』を刋行した旨、明記されており、また『王文成公全書』卷七所收の「大學古本序」が「戊寅」の紀年を有することからも、『傍釋』が同年の刋行であることは疑いえないであろう。しかしながら、この正德十三年刋本は現存しない。

この正德十三年刋本は、王守仁にとっては不滿足なものであった。「甲申」（嘉靖三年、一五二四、王守仁五十三歲）執筆の「與黃勉之」（『王文成公全書』卷五）では、「古本之釋、不得已也。然不敢多爲辭說、正恐葛藤纏繞則枝幹反爲蒙翳耳。短序亦嘗三易稿、石刻其最後者。今各往一本、亦足以知初年之見、未可據以爲定也」（古本の釋は、已むを得ざるなり。然れども敢へて多く辭說を爲さざるは、正に葛藤纏繞すれば則ち枝幹反りて蒙翳を爲すを恐るるのみ。短序も亦た嘗て三たび稿を易へ、石刻は其の最後なる者なり。今各〻一本を往［おく］るも、亦た以て初年の見を知るに足るも、未だ據りて以て定まると爲すべきにあらざるなり）と、自著への不滿を記している。特に、最後に「足以知初年之見、未可據以爲定也」（以て初年の見を知るに足るも、未だ據りて以て定まると爲すべきにあらざるなり）とあるように、正德十三年、王守仁四十七歲の折に刋行された本書は、「年譜一」の正德十六年（一五二一、王守仁五十歲）の項に、「是年先生始揭致良知之敎」（是の年、先生始めて致良知の敎へを揭ぐ）とある、王守仁の晩年の定論たる「致良知說」を踏まえていないことが致命的だったと考えられるのである。[3]

王守仁は「致良知說」を踏まえた本書の改定を志していたようである。「甲申」（嘉靖三年、一五二四、王守仁五十三歲）執筆の「與黃勉之」と同じ年に記された「與黃勉之　二」（『王文成公全書』卷五）において彼が、「大學古本曾無下筆處。有辜勤勤之意、然此亦自可徐徐圖之。但古本白文之在吾心者、

未能時時發明、卻有可憂耳」（大學古本は曾て筆を下す處無し。勤勤の意に辜［そむ］く有り、然れども此れも亦た自ら徐徐に之れを圖るべし。但だ古本の白文の吾が心に在る者は、未だ時時發明する能はずして、卻りて憂ふべき有るのみ）と記していることからも、それは明らかであろう。しかしながら、結局彼はその宿願を果たすことなく亡くなっているのである。

以上において述べた如く、王守仁の生前に刊行された『傍釋』は、現存しない、前記の正德十三年刊本のみであった。一方、王守仁沒後の刊本として現存するものとしては、以下の三種が擧げられる。

隆慶二年（一五六八）刊『丘陵學山』所收[4]の『大學古本』（以下「學山本」と略[5]）

萬曆三十六年（一六〇八）刊『大學古今本通考』所收の『大學傍註古本』[6]

乾隆年間（一七三六～一七七六）刊『函海』所收の『大學古本旁註』（以下「函海本」と略[7]）

上記三種の刊本においては、その傍釋において多くの相違點がみられる。その全貌については、前掲の水野實氏の論文に詳しいが、結論的に言うならば、王文祿（嘉靖十年［一五三一］の擧人）が跋文において、「嘉靖丁亥秋、先康毅君、率祿渡江、扣陽明洞。天聞王龍溪先生講大學、得古本傍釋。・・・祿今重梓」（嘉靖丁亥［六年、一五二七］秋、先康毅君、祿を率ひて江を渡り、陽明洞を扣［たた］く。天、王龍溪先生の大學を講ずるを聞き、古本傍釋を得たり。・・・祿今重梓す）と記している「學山本」が、最も確實に『傍釋』の本來の內容を保存しているものと考えられるのである。

以上において述べた如く、現存する『傍釋』は、王守仁本人が「足以知初年之見、未可據以爲定也」（以て初年の見を知るに足るも、未だ據りて以て定まると爲すべきにあらざるなり）との不滿を有していたものであった。したがって中國では、王守仁の高弟たる錢德洪が、最晚年の王守仁の『大學』解釋を記した『大學問』（『王文成公全書』卷二十六）が世に出た後においては、特に重視されることもなく、いくつかの叢書に收められはしたものの、陽明學の信奉者たちの注意を引くこともなかったと考えられるのである。[8]

二、佐藤一齋による『大學古本傍釋』への注目および僞作説の否定

『標注傳習錄』巻上の「徐愛引言」（先生於大學格物諸説・・・）における、三輪執齋の「舊本大學」の語への注が、「陽明先生嘗著大學旁訓、今不傳」（陽明先生嘗て大學の旁訓を著すも、今、傳はらず）となっているのに對して、『傳習錄欄外書』「通行本」には、以下のような欄外書が記されている。(9)

文成公大學以舊本爲正、旁有釋。其本漢土久傳之、而本邦人所未見。至文政甲申、吳舶始載來。執齋謂其不傳、以當時未見耳。

【書き下し文】

文成公の大學は舊本を以て正と爲し、旁らに釋有り。其の本は漢土に久しく之れを傳ふれども、而れども本邦の人は未だ見ざる所なり。文政甲申（七年、一八二四）に至り、吳舶始めて載せ來る。執齋、其の傳はらざるを謂ふは、當時未だ見ざるを以てのみ。

このように、佐藤一齋は日本において初めて『大學古本傍釋』を實見した研究者であった。しかしながら、周知のごとく、清朝の毛奇齡を初めとして、本書に關しては僞作説が多く存在する。以下の議論の前提として、まず毛氏の説を擧げておきたい。

毛奇齡「王文成傳本」（『西河合集』第八十一册）(10)卷一

文成所示者是禮記原本。今行世有註釋者係門人僞入之、大不足據。後嘉靖間、給事賀欽好學棄官、還遼東、出陽明古本大學教學者。但有章截、竝無註釋。章截如大學之道至天下平爲一截、自天子至未之有也爲一截、所謂誠其意至此謂知本爲一截類。

【書き下し文】

文成の示す所の者は是れ禮記の原本なり。今、世に行はれる註釋有る者は門人の僞りて之れを入れるに係り、大いに據るに足らず。後、嘉靖の間に、給事賀欽、學を好み官を棄て、遼東に還り、陽明の古本大學を出して學を教ふる者なり。但だ章截有りて、竝びに註釋無し。章截は大學の道より天下平らかなりに至るまでを一截と爲し、天子より未だ之れ有らざるなりに至るまでを一截と爲し、謂ふ所の其の意を誠にするより此れを本を知ると謂ふに至るまでを一截と爲すの

類ひの如し。

このような僞作說を、佐藤一齋は、『大學古本傍釋』を實見する以前より批判していた。以下の『大學一家私言』において彼は既に旗幟を鮮明にしているのである。

『大學一家私言』（國士舘大學圖書館所藏。翻刻は「大日本思想全書」第十六卷、三一八頁、先進社、一九三一。一齋、二十四、五歲の時に執筆[11]。當時は未だ『大學古本傍釋』を實見せず）

毛氏奇齡著王文成傳云、文成所示者是禮記原本。今行世有注釋者係門人僞入之、大不足據。嘉靖間、給事賀欽出陽明古本大學敎學、但有章截、竝無注釋。毛此（國士舘大學圖書館所藏本は「氏」に修正）說亦鹵莽甚矣。夫陽明大學不名以旁釋乎。而有章截無注釋者、是徒白文耳、何旁釋之有。由是攷之、其晩歲校定本在彼邦亦或亡佚不傳歟。

【書き下し文】

毛氏奇齡、王文成傳を著して云ふ、文成の示す所の者は是れ禮記の原本なり。今、世に行はれる注釋有る者は門人の僞りて之れを入れるに係り、大いに據るに足らず。嘉靖の間に、給事賀欽、陽明の古本大學を出して學を敎ふるに、但だ章截有りて、竝びに注釋無し、と。毛の此の說も亦た鹵莽なること甚し。夫れ陽明の大學は旁釋を以て名づけざるか。而して章截有りて注釋無き者は、是れ徒(ただ)に白文のみにして、何ぞ旁釋の有らんや。是れに由りて之れを攷(かんが)ふるに、其の晩歲の校定本は彼の邦に在りても亦た或いは亡佚して傳はらざるか。

この『大學古本傍釋』が王守仁の眞作であるという見解は、同書を實見するに及んでますます强固なものとなった。

「大學古本旁釋序」（『大學古本旁釋』所收）

王文成公大學古本旁釋、本邦人所未見。余嘗檢朱彝尊經義考曰、文成大學一本四卷、取鄭注孔義本而旁釋之。毛奇齡曰、今行本有注釋者係門人僞入。嘉靖間、給事賀欽出陽明大學、有章截、無注釋。案文成序明明曰傍爲之釋、而今以無釋者爲眞、豈其然乎。至於文政甲申、筑人抵崎、始得之吳商、轉傳歸於余。其書爲淸人李氏調元刻本。詮釋厖厖止數處。後半截尤簡略、與世之訓注事體殊異。遽讀之、若淺率不經意者。毛氏斥以爲僞入、殆以此歟。嘗讀文成答顧東橋書、其所擧問目、有似指旁釋中語者、久疑之。今取比校、果然。則知

決非門人所僞造矣。但自序係正德戊寅舊撰、經義考所引亦與此同。當時未專說良知之說、故序中亦不及之。嘉靖癸未、與薛尙謙書有云、致知二字、在虔時終日論此、同志中尙多未徹。近於古本序中改數語、頗發此意。今閱文錄所收古本序、於致知三致意焉、與李本序不同、是知李本序未經改定也。至於經義考指爲四卷、今不可考。李本則本文一卷、附錄一卷、共一本。而附錄全襲取經義考。蓋出於調元所爲矣。錢德洪曰、大學問、鄒謙之嘗附刻於大學古本。而其跋載在東廓集、則鄒氏刻本、其有大學問可知也。余今重訂之、序取文錄所收者、旁釋極爲簡易。因亦僭補數條、除去李本附錄、依倣鄒本、以大學問附焉。庶幾於讀古本者、或有所裨益爾。

文政十二年己丑嘉平日晦、江都佐藤坦識。

【書き下し文】

王文成公の大學古本旁釋は、本邦の人の未だ見ざる所なり。余嘗て朱彝尊の經義考を檢するに曰く、文成の大學は一本四卷、鄭注孔義本を取りて旁らに之れを釋す、と。毛奇齡曰く、今、行はれる本に注釋有る者は門人の僞りて入れるに係る。嘉靖の閒に、給事賀欽、陽明の大學を出すに、章截有りて、注釋無し、と。案ずるに文成の序に明明に傍らに之れが釋を爲すと曰ふに、而して今、釋無き者を以て眞と爲す、豈に其れ然るや。文政甲申（七年、一八二四）に至り、筑人、崎に抵り、始めて之れを吳商に得、轉じて傳はりて余に歸す。其の書は淸人李氏調元の刻本爲り。詮釋は厖厖數處に止まる。後ろの半截は尤も簡略にして、世の訓注と事體殊に異なる。遽かに之れを讀むに、淺率にして意を經ざる者の若し。毛氏の斥けて以て僞はりて入れると爲すは、殆ど此れを以てか。嘗て文成の顧東橋に答ふるの書を讀むに、其の擧ぐる所の問目は、旁釋中の語を指すに似たる者有り、久しく之れを疑ふ。今取りて比校するに、果して然り。則ち知る、決して門人の僞造する所に非ざるを。但だ自序は正德戊寅（十三年、一五一八）の舊撰に係り、經義考の引く所も亦た此れと同じ。當時未だ專らには良知の說を說かず、故に序中も亦た之れに及ばず。嘉靖癸未（二年、一五二三）、薛尙謙に與ふるの書に云へる有り、致知の二字は、虔に在る時、終日此れを論ずるも、同志の中、尙ほ多くは未だ徹らず。近ごろ古本の序中に於て數語を改め、頗る此の意を發す、と。[12] 今、文錄に收むる所の古本序[13]を閱するに、致知に於て三たび意を致し、李本の序と同じからず、是れ李本の序の未だ改定を經ざるを知るなり。經義考の指して四卷と爲すに至りては、今、考ふべからず。李本は則ち本文一卷、附錄一卷、共に一本なり。

而して附録は全て經義考を襲ひ取る。蓋し調元の爲す所に出でしならん。錢德洪曰く、大學問は、鄒謙之、嘗て大學古本に附刻せし、と。[14] 而して其の跋は載せて東廓集に在れば、[15] 則ち鄒氏の刻本は、其の大學問有ること知るべきなり。余、今之れを重訂し、序は文錄に收むる所の者を取り、旁釋は極めて簡易爲り。因りて亦た僭かに數條を補ひ、李本の附錄を除き去り、鄒本に依り倣ひて、大學問を以て附す。庶幾はくは古本を讀む者に於て、或いは裨益する所有らんのみ。

文政十二年己丑、嘉平の日晦（十二月三十日、一八三〇年一月二十四日）、江都の佐藤坦識す。

この文は、彼が自己の所藏する『大學古本旁釋』の寫本の冒頭に記したものだが、[16] 王守仁自身の言によって毛氏の說を完膚なきまでに叩いており、今日の水準からみても見事な論となっている。[17] この『大學古本傍釋』に對する注目、そしてそれを王守仁の眞作としたことは、同時代の水準を拔く見識であり、彼の創見と言えるであろう。

現在、東京都立中央圖書館の河田文庫には、佐藤一齋の手になる、多數の『大學古本旁釋』の寫本、あるいは和刻本『古本大學』への書入本が所藏されており、彼がいかに本書を重視していたかを如實に物語るものとなっている。[18] そしてそのすべてにおいて、王守仁の「大學古本序」[19] が大學の本文の前に置かれているのであるが、特に和刻本『大學』への書入本（一二三-W-五〇）においては、「大學古本序」（和刻本では「古本大學序」とされている）に對して、「插注」という、極めて特色のある注釋がなされていることが注目される。

「插注」というと人は、本文中に插入された、割注のようなものを想像するものと思われる。しかしながら、その實態は大きく異なっている。以下に、一齋による插注が施された、「古本大學序」の全文を擧げておく（［　］內が「插注」[20]）。

古本大學序　　［後學佐藤坦插注］

陽明先生撰

大學之［樞］要［唯在於］誠［實吾］意［念之所發］而已矣。誠［實吾］意［念所發］之功［夫］格［正吾意念所在之事］物而已矣。誠［實吾］意［念所發］之極［致唯在於］止［於］至善［之本體］而已矣。止［於］至善［本體］之［準］則［唯在於］致［極意本體固有靈昭不昧之良］知而已矣。［大學一書之蘊蓋盡乎此也。身之主宰謂之心、故其曰］正心

[者謂] 復其 [心之本] 體也。[心之形體謂之身、故其曰] 修身 [者] 著其 [身之發] 用也、[均之止至善也。但因所指而異其名耳。故人] 以 [此] 言乎 [自] 己、[則] 謂之明 [明] 德 [也。明明德者乃所以止至善也、又] 以 [此] 言乎 [他] 人 [則] 謂之親民 [也。親民者乃所以止至善也、所以明明德也。又] 以 [此汎] 言乎天地之間、[則天理流行萬物化生、何莫而順至善之動也。故止至善一句全] 備 [而不傷] 矣。是故至善也者 [乃人] 心之本體、[太極之存乎我者] 也。[唯其感而] 動 [於意念也、不得無過與不及矣]、而後 [始] 有不善 [形乎其際也。然] 而本體之 [良] 知 [炯然常照、昭然常明]、未嘗不知 [其果是乎、其果不是] 也。意 [云] 者 [自] 其 [心之發] 動 [而名] 也。物 [云] 者 [自] 其 [心之] 事 [物而名] 也。[故] 致 [極] 其本體、其本體 [常照常明] 之 [良] 知、而 [後意念之發] 動 [始] 無 [有] 不善 [者也。雖] 然非卽其 [意念所在之] 事 [物] 而格 [正] 之、[去其不正、歸之於正也]、則亦 [復] 無以致 [極] 其 [良] 知 [也]。故 [其曰] 致 [極良] 知者、[乃] 誠 [實] 意 [念] 之本 [原] 也、[而其曰] 格 [正事] 物者、[又] 致 [極良] 知之實 [功] 也。[夫] 物 [旣] 格 [焉、莫不正矣]、則 [良] 知 [之所知者無有虧缺障蔽、而乃以極其] 致、而意 [念之所發者始無自欺而可以謂之] 誠 [矣]、而 [爲] 有以 [得] 復其 [心之] 本體 [也]。是之謂止 [於] 至善 [矣。蓋以古之] 聖人懼 [天下] 人之 [不知求至善於吾心而徒] 求之於外 [而不已] 也。而反覆其辭、[引援點證、錯綜變化、不必節分疏而理自確然乎其善美。世儒不察遽讀之、輒輕以爲是罔統歸有錯誤也。於是乎孔門相傳之] 舊本 [方分] 析、而聖人 [立教] 之意 [遂] 亡 [滅] 矣。是故 [我乃就舊本立之說曰、大學之要在於誠實意念而已]。不務 [求] 於誠 [實] 意 [念] 而徒以格 [正事] 物者、[吾] 謂之支 [離不取也。誠實意念之功在於格正事物而已]。不 [從] 事於格 [正事] 物而徒以誠 [實] 意 [念] 者、[吾] 謂虛 [罔不取也。誠實意念之極在於止至善本體而已。止至善本體之則在於致極良知而已]。不本 [之] 於致 [極良] 知、而徒以格 [正事] 物、誠 [實] 意 [念] 者、[吾] 謂之妄 [作不取也]。[何則] 支 [離] 與虛 [罔] 與妄 [作]、其於 [吾心] 至善 [之本體] 也、[相去隔] 遠矣。[誠意固是美、而] 合 [縫] 之以 [居] 敬 [之說]、而益 [見] 綴 [旒經文固明矣。而] 補 [緝] 之以 [格致之] 傳、而益 [見] 離 [披]。吾懼 [後世] 學 [問] 之 [道不見其要]、日遠於至善而 [不自覺] 也。[於是敢除] 去 [朱子之] 分 [別] 章 [句]、而復 [之於孔門之] 舊本、[且] 傍

［側］爲之［解］釋以引［長］其義［理也。夫然后］庶幾復［見］見聖人［體道］之心［也］、而［學者］求之者［亦］有其要［而不差也］。噫［嘻］、乃若致［極良］知［之說］、則存乎心［自］悟［之而非簸異筆舌之所能盡也。故學者能］致［極良］知焉［而有自悟於心也、則大人之學］盡矣。

【書き下し文】（「插注」を含む）

大學の樞要は唯だ吾が意念の發する所を誠實にするに在るのみ。吾が意念の發する所を誠實にするの功夫は吾が意念の在る所の事物を格正するのみ。吾が意念の發する所を誠實にするの極致は唯だ至善の本體に止まるに在るのみ。至善の本體に止まるの準則は唯だ意の本體の固有の靈昭不昧の良知を致し極むるに在るのみ。大學の一書の蘊は蓋し此に盡くるなり。身の主宰は之れを心と謂ひ、故に其の心を正すと曰ふ者は其の心の本體を復するを謂ふなり。心の形體は之れを身と謂ひ、故に其の身を修めると曰ふ者は其の身の發用を著すなり、之れを至善に止まるに均しくするなり。但だ指す所に因りて其の名を異にするのみ。故に人、此れを以て自己を言へば、則ち之れを明德を明らかにすると謂ふなり。明德を明らかにする者は乃ち至善に止まる所以なり、又た此れを以て他人を言へば則ち之れを民を親しむと謂ふなり。民を親しむ者は乃ち至善に止まる所以なり、明德を明らかにする所以なり。又た此れを以て汎く天地の間を言へば、則ち天理流行して萬物化生す、何ぞ至善の動に順ふこと莫からんや。故に至善に止まるの一句は全て備はりて傷つかず。是の故に至善なる者は乃ち人心の本體にして、太極の我れに存する者なり。唯だ其の感じて意念に於て動くや、過ぎたると及ばざると無きことを得ず、而して後、始めて不善の其の際に形はるることと有るなり。然れども本體の良知は炯然として常に照らし、昭然として常に明らかなれば、未だ嘗て其の果して是なるや、其の果して不是なるかを知らずんばあらざるなり。意と云ふ者は其の心の發動してよりして名づくるなり。物と云ふ者は其の心の事物よりして名づくるなり。故に其の本體を致し極むれば、其の本體は常に照らし常に明かなるの良知にして、而して後、意念の發動は始めて不善なる者の有ること無きなり。然りと雖も非あれば其の意念の在る所の事物に卽きて之れを格正し、其の不正を去り、之れを正に歸するや、則ち亦た復た以て其の良知を致し極むること無きなり。故に其の良知を致し極むると曰ふ者は、乃ち意念の本原を誠實にするなり、而して其の事物を格正すると曰ふ者は、又た良知の實功を致し極むるなり。夫れ物、既に格し、正しからざる莫

ければ、則ち良知の知る所の者、虧缺障蔽有ること無く、而して乃ち以て其の致を極めて、而して意念の發する所の者、始めて自ら欺くこと無くして以て之れを誠と謂ふべく、而して以て其の心の本體に復するを得ること有りと爲すなり。是れ之れを至善に止まると謂ふ。蓋し古の聖人、天下の人の至善を吾が心に求めるを知らずして徒らに之れを外に求めて已まざるを懼れるを以てなり。而して其の辭を反覆し、引援點證、錯綜變化すれば、必ずしも節して分疏せずとも理、自ら其の善美を確然とす。世儒、察せずして遽かに之れを讀み、輒ち輕ゝしく以て是れ統罔しと爲して錯誤有るに歸するなり。是に於てか孔門相傳の舊本、方に分析して、而して聖人教へを立つるの意、遂に亡び滅す。是の故に我れ乃ち舊本立つるの說に就きて曰ふ、大學の要は意念を誠實にするに在るのみ、と。意念を誠實にするを求むるに務めずして徒らに以て事物を格正せんとする者は、吾れ之れを支離と謂ひて取らざるなり。意念を誠實にするの功は事物を格正するに在るのみ。事物を格正するに從事せずして徒らに意念を誠實にするを以てする者は、吾れ虛罔と謂ひて取らざるなり。意念を誠實にするの極は至善の本體に止まるに在るのみ。至善の本體に止まるの則は良知を致し極むるに在るのみ。之れを良知を致し極むるに本づかずして、徒らに事物を格正し、意念を誠實にするを以てする者、吾れ之れを妄りに作すと謂ひて取らざるなり。何となれば則ち支離と虛罔と妄作とは、其の吾が心の至善の本體に於けるや、相ひ去り隔たること遠し。誠意は固より是れ美なり、而れども之れを合縫するに居敬の說を以てして、而して益ゝ經文を綴旒するを見ること固より明らかなり。而して之れを補緝するに格致の傳を以てして、而して益ゝ離披するを見る。吾れ後世の學問の道、其の要を見ず、日に至善より遠くして自ら覺らざるを懼るるなり。是に於て敢て朱子の章句を分別するを除去して、而して之れを孔門の舊本に復し、且く傍側に之れが解釋を爲して以て其の義理を引きて長くするなり。夫れ然る后、庶幾はくは復た聖人の道を體するの心を見はすを見て、而して學ぶ者の之れを求むる者も亦た其の要を有して差はざることを。噫嘻、乃ち若し良知の說を致し極むれば、則ち心を存して自ら之れを悟るは簸異筆舌の能く盡す所に非ざるなり。故に學者、能く良知を致し極めて自ら心に悟ること有れば、則ち大人の學、盡くせり。

一讀明らかなように、これはもはや注釋ではなく、一種の

翻譯というべきものである。漢文訓讀に新機軸を開いた一齋點で有名な彼は、漢文（中國語文言文）の長所も短所も熟知していたものと思われる。[21] そして、哲學を表現するうえでの文言文の最大の短所は、文言文の持つ解釋の多義性なのである。解釋の多義性は、文學においては長所となりうるものの、哲學の解釋においては、嚴密性に缺ける、という缺點につながりやすい。それを防ぐために、一齋はこの「插注」において、一つの語彙について一つの解釋しか許さないように細心の注意を拂っている。「誠意」は必ず「誠實吾意念之所發」（吾が意念の發する所を誠實にする）、「格物」は「格正吾意念所在之事物」（吾が意念の在る所の事物を格正する）、「止至善」は「止於至善之本體」（至善の本體に止まる）、「致知」は「致極意本體固有靈昭不昧之良知」（意の本體の固有の靈昭不昧の良知を致し極むる）というように、陽明學の基本的語彙については絶對に誤讀を許さない、という一齋の氣迫が今なお傳わってくるかのようである。この「插注」という方式は、あくまでも原文理解の補助にとどまる訓點とは異なり、文言文から文言文へという、一見注釋でありながらも、むしろ翻譯を志向するものとして、時代を超えた先見の明を有していたものと考えられる。そしてこのような形式の注釋を採用したのは、『大學』の本文を讀むのに際して、王守仁の意圖を讀者に完全に理解させておきたい、という一齋の熱意によるものだったと思われるのである。[22]

三、大鹽中齋と『古本大學刮目』

大鹽中齋は、佐藤一齋より二十年ほど遲れて生まれた、次世代の陽明學者であるが、彼も一齋同樣に、『大學古本旁註』を作成し、天保三年（一八三二）の序文を有する『古本大學刮目』に收錄している。

『古本大學刮目』は、明淸の學者の『大學』に關する所說を網羅した、陽明學者大鹽中齋の畢生の大著であるが、彼はその凡例の末尾において、その目睹しえた『傍釋』について以下のように述べている。[23]

「凡例」（末尾）

一、經文因署諸說、旣爲三十有七節、實屬割裂、故別載王子古本白文傍註於前。此爲便於覽者撿閱故也。而傍註抽出於李氏涵海、王文錄百陵學山中。彼此校訂以惠學者。所謂珍書而莫爲容易觀。

【書き下し文】

經文は諸説を署すに因りて、既に三十有七節と爲りて、實に割裂に屬す、故に別に王子の古本白文傍註を前に載す。此れ覽者の撿閲に便なるの爲の故なり。而して傍註は李氏の涵海、王文錄の百陵學山の中より抽出す。彼此校訂して以て學ぶ者に惠む。所謂る珍書にして容易に觀るを爲すこと莫ければなり。

ここからもわかるように、彼は「學山本」と「函海本」の二種の版本を目睹しており、そのため、彼の『大學古本旁註』は、「學山本」と「函海本」の注釋を重ね合せて相互の不足を補い、さらに校訂してそれを傍注の形で表わすことが可能となった。從って、テキスト・クリティークの面において、その『大學古本旁註』は、一齋の『大學古本旁釋』より一歩進んだものとなっているのである。

例えば、「函海本」を底本とする、一齋の『大學古本旁釋』においては、最初の傍釋は、『大學』冒頭部の「大學之道在明明德、在親民、在止於至善」（大學の道は明德を明らかにするに在り、民を親しむに在り、至善に止まるに在り）の「在親民、在止於至善」（民を親しむに在り、至善に止まるに在り）に對する、「親愛也。明明德親民、猶言修己安百姓。明德親民無他、惟在止於至善。盡心之本體、謂之止至善」（親は愛なり。明德を明かにし民を親しむは、猶ほ己を修め百姓を安んずると言ふがごとし。德を明らかにし民を親しむは他無し、惟だ至善に止まるに在るのみ。心の本體を盡くすは、之れを至善に止まると謂ふ）である。[24] この傍釋は、その内容から見て、「在明明德、在親民、在止於至善」（明德を明らかにするに在り、民を親しむに在り、至善に止まるに在り）全體に對するものであるが、一齋は「函海本」に忠實に、「在親民」（民を親しむに在り）以下に掛けている。それに對して中齋は、この傍釋を「在明明德」（明德を明らかにするに在り）の位置に移動し、さらにその後に「學山本」によって、「至善者、心之本體。知至善惟在于吾心、則求之有定向」（至善とは、心の本體なり。至善の惟だ吾が心に在るを知れば、則ち之れを求むるに定向有り）の文を續けているのである。

實は、この傍釋全體を、「學山本」は、冒頭の「大學之道」に掛けているのであるが、中齋がその内容から、傍釋を「在明明德」（明德を明らかにするに在り）の位置に移動したことは明らかであり、そのことはまた、中齋が本書の編纂にあたって、近代的なテキスト・クリティークの意識を有していたこ

とを示しているのである。

それでは中齋は、『傍釋』自體についてはどのような見解を有していたのだろうか。この點について、「凡例」では以下のように述べられている。

「凡例」（第二條）

一、自朱子改本行于世、禮記無大學。方正學先生曰、學古者以不見古全書爲憾。王子刻古本大學、蓋亦其意也。可謂有功於聖經矣。然至呂晩村輩、攻擊王子不遺餘力、作天蓋樓語錄曰、陽儒陰釋之徒惡格物之說害己、彎弓反射、輒以古文石經爲辭云云。夫古文石經非古本大學也。自改本行于世、學士大夫不復知禮記原有大學。當其時、豐坊者僞作石經古文、上於朝。罪不獨在豐坊也、必有在焉。晩村所云古文石經、指此也。而信石經者東林顧端文高忠憲輩、而其謂陽儒陰釋、反斥王子居多矣。然不擧古本大學而石經古文云者何也。推其意、起乎黨同伐異之私。如明擧王子復古本之實、則朱子之改本、反非聖人之舊、而其遷改經文之事亦明晰焉、雖兒輩得知之、則改本衰壞之基也。是故朦朧其語、似俾不知古者必疑陽明古本大學卽石經之僞文。噫、晩村欲惡王子、併抹殺古本大學、誣亦大矣。

【書き下し文】

朱子の改本の世に行はれてより、禮記に大學無し。方正學先生曰はく、古を學ぶ者、古の全書を見ざるを以て憾みと爲す。王子、古本大學を刻するは、蓋し亦た其の意ならん。聖經に功有りと謂ふべし、と。然るに呂晩村の輩に至りて、王子を攻擊して餘力を遺さず、天蓋樓語錄を作りて曰はく、陽儒陰釋の徒、格物の說の己を害するを惡み、弓を彎（ひ）きて反りて射り、輒ち古文石經を以て辭と爲す云云、と。夫れ古文石經は古本大學に非ざるなり。改本、世に行はれてより、學士大夫、復た禮記に原と大學有るを知らず。其の時に當りて、豐坊なる者、僞りて石經古文を作り、朝に上（のぼ）す。罪、獨り豐坊のみに在らざるなり、必ず焉れ在ること有り。晩村の云ふ所の古文石經は、此れを指すなり。而して石經を信じる者は東林の顧端文、高忠憲の輩にして、其の陽儒陰釋と謂ふは、反りて王子を斥くるに居ること多し。然れども古本大學を擧げずして石經古文と云ふ者は何ぞや。其の意を推すに、黨同伐異の私を起こすならん。如し明らかに王子、古本を復するの實を擧ぐれば、則ち朱子の改本は、反りて聖人の舊に非ずして、而して其の經文を遷し改むるの事も亦た明晰にして、

兒の輩と雖も之れを知るを得れば、則ち改本衰壞の基なり。是の故に其の語を朦朧として、古を知らざる者をして必ず陽明の古本大學は卽ち石經の僞文ならんと疑はしむるに似たり。噫、晩村、王子を惡まんと欲して、併せて古本大學を抹殺す、誣ふるも亦た大なるかな。

ここでは、呂留良（晩村）が王守仁の『古本大學』と豐坊の『僞石經大學』とを混同していることについて、「黨同伐異之私」に出るものとして激しく攻撃している。[25] そして彼のこの議論は、朱子學と陽明學との爭いを離れて、今日の學術的な立場から客觀的に見ても正しいものなのである。

しかしながら若干奇異に思われるのは、佐藤一齋があれほどの熱辯を振るわざるを得なかった、『大學古本傍釋』（『旁註』）が僞作ではないか、との疑惑について中齋が一切觸れていないことである。この點について中齋は、一齋の論證によってすべて解決濟み、と考えていたのではないだろうか。中齋は『古本大學刮目』公刊の際に一齋の序文を乞う書簡を送っているほどであり、一齋の『傍釋』に關する見解は當然熟知していたはずなのである。[26]

以上からも明らかなように、佐藤一齋から大鹽中齋へと、江戸後期の陽明學者たちは、着實に『大學古本傍釋』に關する研究を深化させていった。前述の如く、「函海本」しか見ることのできなかった一齋に對し、大鹽中齋が「學山本」と「函海本」の二種の版本を目睹することによって、テキスト・クリティークをより精密なものとしていったことなどは、その顯著な事例である。

しかしながら、彼らの精密な研究の成果は、今日十分繼承されているのであろうか。殘念ながら、一齋があれほど明快に論破した、『傍釋』が僞作であるとする說すらも、今日なお完全には過去のものとなっていないのが實情なのである。[27] このような意味において、江戸時代後期の日本における陽明學研究は、いまだに乘り越えられてはいない。東京都立中央圖書館河田文庫と大阪府立中之島圖書館玄武洞文庫とにそれぞれ保存されている佐藤一齋と大鹽中齋の藏書は、そのことを我々に語りかけているのである。

【附記】 本稿作成のための調査において、東京都立中央圖書館、大阪府立中之島圖書館および靜嘉堂文庫、國士舘大學圖書館の館員各位より多大な援助を賜っている。特に感謝の意を表する次第である。

【本稿は科學研究費補助金（基盤研究（C）課題番號17K022
09）による成果の一部である】

（1）なお、佐藤一齋は一般に朱王折衷の學者とされるが、筆者は彼が思想的にも陽明學の信奉者であったと考えている。この點に關しては以下の拙稿を參照のこと。永富青地「佐藤一齋は朱子學者か―『欄外書』の記載より見たる―」、『朱子學とその展開』、汲古書院、二〇二〇。

（2）中國における『大學古本傍釋』の刊行については、水野實「王守仁の『大學古本傍釋』の考察」（『日本中國學會報』第四十六號、一九九四）に詳しい。

（3）山本正一『王陽明』（中文館書店、一九四三）、山下龍二『陽明學の研究　成立篇』（現代情報社、一九七一）は「致良知說」の確立を前年である正德十五年（一五二〇、王守仁四十九歲）のこととするが、本稿の論旨には影響しない。

（4）内容は『百陵學山』所收のものと同一である。『百陵學山』は萬曆十二年（一五八四）に『丘陵學山』を增補して改名した叢書。

（5）現在、華東師範大學圖書館所藏の『百陵學山』本を影印の上、『續修四庫全書』經部第一五九册に所收。上海古籍出版社、一九九六。

（6）現在、明萬曆刻本を影印の上、『四庫全書存目叢書捕編』第九十二册に所收。齊魯書社、二〇〇〇。

（7）現在、影印の上、『叢書集成初編』第四七七册に所收。商務印書館、一九三六。

（8）ただし、江右王門の諸子がその誠意說の理論的根據として『傍釋』を利用したことはあった。しかしながら、やがて彼らは『傍釋』から離れていくこととなる。この點に關しては荒木龍太郎「陽明學に於ける誠意說の展開と變容―江右王門の『古本大學』受容をめぐって―」（『九州中國學會報』第三十二卷、一九九四）を參照のこと。

また、本書が無視されるようになった今一つの要因として、毛奇齡を代表とする僞作說の存在があげられるが、この點は次節において觸れることとしたい。

（9）佐藤一齋による『傳習錄欄外書』のテキストに關しては、以下の拙稿を參照のこと。永富青地「佐藤一齋と『傳習錄欄外書』―江戸期における陽明學の研究」、『儒教　その可能性』、早稻田大學出版部、二〇一一。

（10）現在、『四庫全書存目叢書』子部第八十七册、莊嚴文化事業有限公司、一九九六、に所收。

（11）『大學欄外書』自序に、「余自二十四五歲、已疑紫陽大學、因就古本讀之。時著一書、曰一家私言」とある。從って、『大學一家私言』の執筆は寛政七年（一齋二十四歲、一七九五）または翌八年（一齋二十五歲、一七九六）のこととなる。

（12）「寄薛尙謙　癸未」、『王文成公全書』卷五。

佐藤一齋および大鹽中齋による王守仁『大學古本傍釋』の受容（永富）

(13)「大學古本　戊寅」、『王文成公全書』巻七。
(14)「大學問」、『王文成公全書』巻二十六。
(15)「跋古本大學問」、嘉靖戊戌（十七年、一五三八）序刊『東郭先生文集』（國立公文書館所藏本）巻九。
(16)　東京都立中央圖書館河田文庫所藏本（一二三－W－四六）。なお河田文庫所藏の佐藤一齋の藏書に關しては、東京都立日比谷圖書館編『東京都立日比谷圖書館藏河田文庫目錄』（東京都立日比谷圖書館、一九六二）を參照のこと。
(17)　水野實氏は、前掲の「王守仁の『大學古本傍釋』の考察」において同書が王守仁の眞作であることを論證しているが、その際に一齋の說を論據の一つとしている。
(18)　これらの諸本に付された「傍釋」は、「函海本」に多少校訂を加え、さらに一齋が自己の見解によって十六條の「補」說を施したものである。なお、前掲のごとく、中國で刊刻された『大學古本傍釋』には三種あるが、「函海本」以外のものに一齋が全く言及していないことから、彼の目睹した『傍釋』は「函海本」のみであったものと思われる。なお、これらの『大學古本旁釋』の寫本、あるいは和刻本『古本大學』への書入本に關しては、中村安宏「佐藤一齋の講釋用『大學』書入」（『日本思想史研究』第二十一號、一九八九）十九～二十一頁に簡明な紹介がある。
(19)『王文成公全書』巻七に所收。
(20)　東京大學東洋文化研究所には大橋明による『大學欄外書』の寫本が所藏されており、その中には本「插注」も收められているが、河田文庫所藏本と比してより簡略なものであり、かつ一齋自身の手になるものではないため、ここでは河田文庫所藏本により翻刻を行っている。なお大橋明寫本は、服部宇之吉他監修、關儀一郎編『日本名家四書注釋全書　學庸部二』（東洋圖書刊行會、一九二三）所收の『大學欄外書』の底本として使用されている。
(21)　一齋點に關しては、以下の諸論文を參照のこと。鈴木直治『中國語と漢文』、光生館、一九七五、第二章第四節二「佐藤一齋の訓點」、齋藤文俊「近世における漢文訓讀法の變遷と一齋點」（中村春作他編『「訓讀」論―東アジア漢文世界と日本語』、勉誠出版、二〇〇八）、同氏「近世日本の訓讀法」（中村春作編『訓讀から見なおす東アジア』、東京大學出版會、二〇一四）。
(22)　現在靜嘉堂文庫に所藏されている佐藤一齋『大學摘說』（文政己丑［九年、一八二九］序）の寫本には、「文成古本序詞簡而旨遠、不易可讀。試插入數字以解之如左」（文成の古本序は詞は簡なれども旨は遠くして、易［やす］くは讀むべからず。試みに數字を插入して以て之れを解すること左の如し）との短序を附した上で、「大學古本序」の插注が記されている。これは恐らくは、一齋自身が河田文庫所藏の『大學』書入本の插注の內容を移植したものと思われる。また前述の國士館大學圖書館所藏『大學一家私言』の附錄において

も、「王子大學古本序」として、「大學古本序」の插注が收錄されている。

(23) 以下、『古本大學刮目』よりの引用は、大阪府立中之島圖書館玄武洞文庫所藏本による。なお、中齋は『古本大學刮目』所收のものの他にも、慶應義塾圖書館に所藏される江戸中期刊『大學　附大學問』(『慶應義塾圖書館和漢貴重書目錄』[慶應義塾大學圖書館出版會株式會社、二〇〇九] 一二六頁に、「大鹽中齋書入本」として著錄) に、主として朱筆、一部墨筆による、王守仁の『大學古本旁註』(『旁釋』) と、それに對する中齋自身の批注とを記している。筆者は二〇二三年三月刊行の『環日本海研究年報』第二十八號において、同書の全文の翻刻を掲載する豫定である。併せて參照されたい。

(24) 中齋の『大學古本旁註』においては、「學山本」に從って、「猶言修己安百姓」(猶ほ己を修め百姓を安んずると言ふがごとし) の「言」の字を削除している。

(25) 豐坊の『僞石經大學』に關しては、以下の論文を參照のこと。水野實「「僞石經大學」考—その出自と流傳そして波紋及び異本と原本—」、『防衛大學校紀要』第五十七號、一九八八。

(26) なお、この時、中齋より一齋に宛てられた書簡の翻刻および解說は、相蘇一弘『大鹽平八郎書簡の研究』第二册 (清文堂出版、二〇〇三) 六四〇～六五二頁を參照のこと。

佐藤一齋および大鹽中齋による王守仁『大學古本傍釋』の受容 (永冨)

(27) 一代の碩學である島田虔次氏も、『アジア歷史研究入門』第三卷「思想史」(Ⅲ) (同朋社出版、一九八三) において、「陽明の著作というものは、きわめて少ない。單行せられたものは、『傳習錄』『朱子晚年定論』『大學問』、それにもしこれをも陽明の書といえるならば『大學古本旁注』、そのくらいのものでしかない」(同書二七九頁) と述べて、この問題に關する判斷を保留されている。

〈キーワード〉佐藤一齋、大鹽中齋、大學古本傍釋、大學古本序、插注